# ニコラス・ラヴ『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』木曜日（3/3）第三十八章—第三十九章

田　口　まゆみ

# Nicholas Love's *Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*: part 8.

TAGUCHI Mayumi

**[N] 第三十八章：棕櫚の日曜日から直後の木曜日までに我らが主イエスがなされたこと**

[1] 愛に満ち，すべての愛の源泉であられる我らが主イエスは，言葉と行いの両方において，友に対してだけでなく敵に対しても，主の至上の愛をお示しになりたいと思われ，また誰も失われることがなく，すべての人が救われるようにと望まれたので，この世での生が終わりに近づき，受難の時が目前に迫ってくると，人々に広く教えを説くことに専心されました。特にこの三日間，つまり，まず，直前に扱った日曜日，そして続く月曜日，火曜日には，早朝から神殿に上がられて人々に説教をされ，律法学者とファリサイ派の人々と討論して，彼らが罠に掛けようとした質問や多くの微妙な誘惑的な問いかけにお答えになりました。そうして朝から一日専心され，夕べには，弟子たちと共に，前に述べたように，ベタニアのラザロと彼の姉妹たちのいる和やかな宿へと戻って，休息されました。

しかし，そのとき我らが主イエスとユダヤ人たちの間に起こったすべてのことを詳細に述べると長い話になりますし，受難について考えるという目下の目的の邪魔になるので，ユダヤ人を非難するために我らが主が語られたたとえ話や例話，またそのとき起こった他のことは割愛します。民衆がイエスを好むのを見た祭司長たちとファリサイ派の人々は，イエスに対して公然と害をあたえることは危険だと考え[2]，狡猾にかつ残酷に計って，彼らの掟[3]あるいは皇帝への税金についての問答[4]で言葉じりをとらえ，死刑を言い渡そ

平成18年2月6日　原稿受理
大阪産業大学　人間環境学部

1）原注 N
2）Cf. マタイ26：1-5, マルコ14：1-2, ルカ22：1-2, ヨハネ11：45-53.
3）マタイ22：34-40, マルコ12：28-34,　ルカ10：25-28.

うとたくらみました。しかし我らが主には人の心の隅々までがあけすけなので，彼らの狡猾な下心を見抜いて，彼らの質問すべてに賢明にお答えになりました。主の問答は密かに真実に立脚していたので，律法学者は十分に問答に答えたものの，どこをとっても彼らの思いを遂げることができず，完全に敗北して，もはや，あえて質問する者はありませんでした。

また，我らが主イエスは，彼ら，特に律法学者，ファリサイ派の人々の高慢，偽善，強欲，その他の不法を激しく非難され，「律法学者たちとファリサイ派の人々，あなたたちは不幸だ」(マタイ23：23)，さまざまなこの世の賞賛を愛するから，またその他の不法のゆえにと，言われたのです[5]。

[6]しかしながら同時に，主は民衆に，彼らの教えは守り，行いなさい，ただし，彼らの行いや間違った生き方は見倣ってはならないとお命じになりました。そして最後に，ユダヤ人たち一般をエルサレムと呼んで，神に背き自然に反する行いについて語られました。というのも，めん鳥が雛を集めるように，何度も，懸命に，彼らを救済の道へ集めようとされたのに彼らが応じなかったからで，そのため，エルサレムの一時的な，そして永遠の崩壊を予言されたのでした[7]。そこで主は，彼らから去り，神殿を出て弟子たちと主を信じた多くのユダヤ人たちを引き連れてオリーブ山に入られ，さらに例話によって，終末に向けていかに振る舞い，備えるべきかを教え，最後に，神の右側に置かれる正しい人たちが永遠の命を与えられ[8]，左側の正しくない者たちは永遠の悲しみと永遠の死を与えられる，裁きの日のことを語られました[9]。

このように我らが主イエスは，ユダヤの民に対する公けの説教を夕べ近くに終えられて，その後弟子たちだけに，「あなたがたも知っているとおり，二日後は過越祭である。人の子は，十字架に付けられるために引き渡される」と言われました（マタイ26：２)。主の忠実な弟子たちにとってこれは悲しい言葉でした[10]。しかし，邪まな裏切り者のユダは，彼の心に入り込んだ悪魔（サタン）にそそのかされ[11]，どのようにして主の死のきっかけを作ろうか

4）マタイ22：15-22, マルコ12：13-17, ルカ20：20-26.
5）マタイ23：1-36, マルコ12：38-40, ルカ11：37-52, 20：45-47.
6）原注 nota contra lollardos
7）マタイ23：37-39, ルカ13：34-35.
8）マタイ24：３-14, マルコ13：３-13, ルカ21：7-19.
9）マタイ25：31-46.
10）原注 Tradicio domini feria iiijta
11）ヨハネ13：27.

と即座に考えて喜び，邪悪な強欲を膨らませ，眠れないままに翌朝すぐ，つまり水曜日に[12]，祭司長たちや神殿守衛長たち，律法学者たちがカイアファという大祭司の屋敷に集まって，何とか計略を用いてイエスを捕らえ殺そう，しかし民衆の騒ぎを懸念して祭りの間はやめておこうと相談しているところへ行きました[13]。ユダはこの会議のことを嗅ぎつけて，彼らのところへ出かけていって，報酬を支払ってくれるなら，好きな時にイエスを連れて行ってよいと持ちかけました。彼らはユダの申し出を喜んで，大銀貨30枚を支払うことにしました。わたしたちのグロート銀貨が普通の銀貨４枚に相当するように，大銀貨１枚は，銀貨10枚にあたります。そうして不正と強欲の悪が結託して「無垢」の死に同意したのです。

このとき，その不義の裏切り者は，前に述べたように彼が無駄遣いだと言って惜しんだ香油の代価，つまり銀貨100枚を私欲から欲したのでした。そしてそのときから，ユダは，群衆のいないときにイエスを引き渡そうと，良い機会をねらっていたのでした。

[14]またこのとき，水曜日に我らが主に対する裏切りが働かれたので，その日が，一週間のうちで金曜日についで償罪の勤めと禁欲にふさわしい日として定められているのです。

以上がユダとユダヤ人がその水曜日に果たした呪われた役割でした。

その一方で，我らが主イエスと主の尊い仲間は，その日何をしていたのでしょうか。福音書にははっきりと書かれていませんが，それは，その日，主はエルサレムに入られることもユダヤ人たちの前に公然と姿を現されることもなかったからです。それでは，その日一日，主が何をされたと考えればよいでしょうか。わたしは，主はほとんどの時間を，祈りに過されたと考えるのが正しいだろうと思います。主は，この世に来られた目的である人の贖いを行うため，そして主を信じ，愛する主の友だけでなく，残酷な敵のためにも，これまでに，弟子たちに，彼らの敵と彼らを追う者のために祈りなさいと教えた慈愛の完成を実現するために祈られました。同時に，裏切り者ユダとユダヤ人がその日主を殺そうと企てた悪巧みを，はっきりと心でご存知でしたでしょう。

ですから，父への祈りの中で，特に，ダビデが主について，そしてユダとその他の敵についてはるか昔に預言して言った「わたしの賛美する神よ」を唱えられたと考えていいでしょう[15]。しかしさらに，詩篇にあるように（文字通りに解釈するとそうとれます）敵に

---

12）聖書では曜日が明記されていない。ラヴは，水曜日に断食をするという修道院の習慣を説明するために水曜としたと考えられる。See Sargent, p.285, note 144.44.

13）マタイ26：1-5, 14-16, マルコ14：1-2, 10-11, ルカ22：1-6.

14）原注 quare ieiuniatur feria 4 a &c.

15）詩篇108：2. Deus laudem meam ... .以下の復讐についての言及は，特に詩篇108： 8 -20.

報復をすることを望まれたのではなく，正しく，御心を父の御心とひとつにして，そのように主に悪事を仕掛け，強情に罪深い暮らしを続けた者たちに対する正しい罰と，ふさわしい報復を予言されたと考えることが最も適切です。

そして，ラザロと姉妹の善き，愛する友と肉体を持って話ができる状態にあるのはこの日が最後だと思われたので，いつもしてこられたことではあるけれど，教えに満ちた聖なるお言葉で霊的に慰めることに，いつにもまして心を砕かれ，この後に控えている主の受難の大きな悲しみに備えて彼らを力づけ，慰めるために，いつもよりもゆっくりと時間を掛けられたでしょう。そしてなによりも，尊い母を親しみを込めた会話により慰め，またいつも主の甘い霊の言葉に渇いていたマグダラとも特に親しく心を交わされたと信じることができます。その御言葉の味と香りをわたしたちにも与えたまえ。尊いイエス・キリストよ永遠に。アーメン。[n]

**第三十九章　受難の前日に我らが主イエスが催された晩餐，そしてそのときの崇高な状況について**

我らが主イエスが，終わりなき慈悲から，人のために死に甘んじ，尊い御血をわたしたちの贖いのために流すことをお決めになっていた時が来て，主はまず弟子たちと晩餐を催されました[16]。弟子たち，そして全人類に対する大いなる愛が永遠に記憶されるように，また古い掟の言葉を実現し，新しい掟の真実を始め，主の受難によってもたらされる神秘を行うためでした。

この晩餐はこの上なく尊く不思議に満ちたもので，偉大な不思議なことがそこで起こりました。ですから，もしここで内なる敬虔の心を集中させて注意するならば，この晩餐から，そして我らが主イエスがそこでされたことから，慇懃な主は，わたしたちを飢えたままでそこを去らせることはなさらず，わたしたちが切望する主の恵みで満たしてくださり，それによって，多くの霊的な慰めをお与えくださるということがわかります。

[17]この晩餐では，四つの特筆すべきことが起こりました。これらのことは，内なる黙想によって我らが主イエスへの愛を掻き立て，敬虔な愛という，わたしたちの霊的火をともすでしょう。

第一に，肉的な晩餐，[N] そしてそれによって掟を全うした方法 [n] です。第二は，我らが主イエスが弟子たちの足を洗われたことです。第三は，その尊い秘蹟，主の聖体の儀式とその聖別です。そして第四は，主が弟子たちにされた高貴で実り多い説教です。こ

16）マタイ26：17-35, マルコ14：12-31, ルカ22：7-34, ヨハネ13：1-30, 36-38.

17）原注 Nota iiij$^{or}$ meditanda

れら四つの事について，順に語りましょう。

[18]第一の肉的晩餐では，ペトロとヨハネが，我らが主イエスに命じられて[19]，エルサレムの都の，シオンの丘と呼ばれる場所に住んでいる友のところに行きました。この人は二階にこの晩餐を開く広さの部屋がある大きな家を構えていました。そこで我らが主イエスに続いて弟子たちも都に入り，この場所に，その木曜日の夕方近くにやってきました。

[N] さてここで，この話を読んでいる，あるいは聞いている人々よ，全精神を集中させて，この後に語られたこと，話されたこと，行われたことに注目し，心に描いてください。それは心地よく，神への大きな愛を掻き立てるはずです。なぜならこの話には，我らが主イエスの尊い生涯についての黙想のうちでも，力と霊的果実が最も多く含まれているからで，それは，第一に，主の行われたことのそこここに，人類に対する愛の証が表れているからです。ですからここでは他の場所でしてきたように話を簡略にすることなく，むしろ反対に丁寧に語ることにしましょう。[n]

それでは，我らが主イエスが前に述べた場所に来られた後，一階のどこかに立って，弟子たちに教えを説きながら，二階に晩餐の準備ができるのを待っておられるところを思い描いてください。準備がすべて整うと，我らが主イエスと最も親しく近しい聖ヨハネが，忙しく動き回って，すべて滞りなく席が整ったのを確かめると，主のもとに来て，「主よ，いつでも晩餐を始めていただけます」と言いました。

そこで我らが主イエスは十二人の弟子とともに二階に行かれましたが[20]，ヨハネは常に主の隣にいて，おそばを離れませんでした。ヨハネほど，心から，また親しく主に引かれ，主に従った者は他にいなかったからです。ヨハネは主に呼ばれたときに，他の者がしたように逃げることなく，従いました。また主が十字架に掛けられ，亡くなられたときにおそばにいて，その後も，始末が済んで，主が埋葬されるまで立ち去ることがありませんでした。同じようにこの晩餐のときも，他の弟子より年が若かったにもかかわらず主の隣に座ったのです[21]。

我らが主イエスは十二人の弟子たちと晩餐のための食卓につかれると，まずそこに立って熱心に感謝の祈りを唱え，[N] その後主の祝福を受けて，一同は食卓の周りに座りましたが，ヨハネがイエスの隣に座り，習慣に従って年齢の順に座りました。[n]

[22]ここで注意しなければならないことは，その食卓は想像されるように方形で，いろい

18) 原注 primum meditacio de cena
19) ルカ22：7.
20) 原注 Nota de Johanne euangelista
21) ヨハネ13：23.
22) 原注 nota de tabula in cena

ろな板が，ローマ（バチカン）のラテラノ大聖堂[23]で見られるように寄木になっており，一辺が2アーム[24]かそれ以上の長さでした。そしてその正方形の食卓の一辺に弟子たちが三人ずつ座ったでしょう。[N] ただ弟子たちはまっすぐに，[n] そして我らが主イエスは幾分斜めに座られました。これで全員がテーブルの真ん中に手が届き大皿から取り合うことができたでしょう。ですから主が，「わたしと一緒に手を皿に，あるいは鉢に浸した者が，わたしを裏切る」と言われたときに（マタイ26：23），誰のことかわからなかったのです[25]。

このように食卓につかれた様子を想像することができます。また過越の小羊を食べるときについては，我らが主が成就するために来られたモーゼの律法の命令に従い，杖を持って食卓の周りにまっすぐに立っていたときもありますが，福音書のあちこちにあるように座っていた時間もあるわけで，さもなければヨハネがイエスの胸もとに寄りかかるように頭を主に預けることはできなかったはずです。

[26]掟に従って焼いた過越の小羊が食卓に運ばれると，罪の汚点の一つさえない，神の小羊であられる我らが主イエスは，みなの中央で食事を取り仕切る主人として，その尊い手に小羊を取り，切り分けて弟子たちに与え，喜んでいただくように言い，優しいまなざしでみなを慰められました。弟子たちは主がお命じになったので小羊を食べましたが，慰められることはありませんでした。今までにないことをなさるので，主に何かよくないことが起こるのではないかという危惧を振り払うことができなかったのです。そこで主は，みなが食べているときに，悲しい出来事をもっとはっきりとこのように告げられました。「死の苦しみを受ける前に，あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと，私は切に願っていた。はっきり言っておくが，あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしているからだ」（ルカ22：15 & マタイ26：21, マルコ14：18, ヨハネ13：21）。

この言葉は弟子たちの心に鋭い剣のように刺さりました。そこで彼らは食べるのをやめて，顔を見合わせてこう言いました。「主よ，まさかわたしのことでは」（マタイ26：22, マルコ14：19）。ここでよく注意を払うなら，我らが主イエスと，また弟子たちに，同情するはずです。みな大変心を痛めたに違いないからです。しかし裏切り者のユダは食べるのをやめませんでした。この裏切りについての言葉は自分に関係ないと思ったのです。

---

23）ラテラノ大聖堂(the Church of St. John Lateran)は中世の中心的巡礼地のひとつであった。最後の晩餐のテーブルも見ることができた。

24）腕2本分の長さ。

25）Cf. マルコ14：18-20；ルカ22：21；13：ヨハネ21-30.

26）原注 Agnus pascalis

そのときヨハネが，ペトロの合図で，我らが主にこう訪ねました。「主よ，あなたを裏切る者とはだれのことですか」(ヨハネ13：25)。すると我らが主イエスは，ヨハネに，特に愛しておられる者だからというようにこっそりと，その裏切り者はだれなのかを特定されました。ヨハネは大変驚いて，悲しみ心を痛めましたが，ペトロには告げず，イエスの方によりそい，その尊い胸元にそっと頭を置いたのです[27]。

聖アウグスティヌスが言っているように，我らが主イエスはだれが裏切るのか教えようとはなさらなかったのです。それは，ペトロなら，その者を［N］歯で［n］八つ裂きにするだろうとご存知だったからです[28]。

また同じくアウグスティヌスによれば，ペトロは活動生活にある者を象徴し，ヨハネは黙想生活者を象徴しています[29]。ここでの教えと象徴は，黙想生活にある者は，人知を超えた所業には口を出すことはせず，また神に対して行われた罪に対して表立った報復をしようとはしないが，心の中で悲しみ，情熱的な祈りによってひたすら神にのみ向かい，それだけいっそう深く神に向かい，近づいて，万事を神の思し召しと決まりに委ねるものであるということです。

もっとも黙想生活者も，時には神に対する情熱と人の魂に益になるようにという思いから，［N］神に呼ばれて立ち上がるかのように，［n］外に向かって行動に出ることもあります。

また，ヨハネが，裏切り者はだれか訊きなさいと彼に命じたペトロにさえ教えなかったという点は，黙想生活にある者は，主の密かなことを人に明かさないのだということを示しています。

[30]たとえば聖フランシスコは，人の魂を癒すために，あるいは啓示によって神に動かされた場合以外には，密かに受けた啓示について他の人に明かすことはなかったと書いてあります。

またさらにこの話の中で，愛するヨハネがそのように身を寄せて，尊い胸元にもたれるのをそのように気安くお許しになった，我らが主イエスの偉大な慈愛に注目しましょう。主よ，あなたたちはなんと優しい，真実の愛をわかちあわれたのでしょうか。

[31]［N］これはヨハネにとって，甘美な安らぎでした。そしてすべてのキリスト教徒に

27) ヨハネ13：24-26.

28) 原注 augusutinus in omelia dixit Jesus petro(Augustine, *In Johannis Evangelium Tractatus LXI*, cols. 1799-1801.

29) 原注 Nota de contemplatiuis

30) 原注 nota de sancto francisco

31) 原注 N

とって益あることです。学者たちが言うように，永遠の知恵の泉から，主の聖なる福音という尊い水を飲むからで，この水で，主は，後に全聖教会に慰めを与え，様々な異端者の毒を消す蜜とされたからです。[n]

[32]さらに，他の弟子たちが，前に述べた，我らが主イエスを裏切る者があるというお言葉に大変心を痛め，食べるのをやめて，これをどう考えればよいのか，どんな慰めがあるのか察しかねて顔を見合わせている様子をごらんなさい[33]。[N] 肉的晩餐と，過越の小羊を食べたこと，そして我らが主イエスがされたたとえ話の終わりについての第一の事項については，ここではこのくらいで十分でしょう。ちなみに，学者たちが言うように，我らが主イエスがその生涯で肉を食べられたという記述は，この一度しか見あたりません。このとき主は，その小羊を肉体の食物としてというより，神秘のために召し上がったのです。[n]

[34]弟子たちの足を洗われた第二の点に関しては，上に述べた話にそってこのように理解するべきです。我らが主イエスが晩餐の席から立ち上がられたので，次に何をなさろうとしているのか，どこへ行こうとされているのかわからないまま，すぐに弟子たちも席を立ちました。そして主と共に，その場所を見た人の語るとおり，前に述べた二階から，階下に行きました。そこで主は弟子たち全員に腰を下ろすように命じ，そこへ水を運ばせました。そして，[N] 多分かさばってこれからしようとなさっていることの邪魔になったからでしょう，[n] 上着を脱ぎ，麻の手ぬぐいを腰にまとわれ，よく見られたような石のたらいに自ら水を汲んで運び，ペトロの足元に置くと，膝をついて彼の足を洗おうとなさいました。ペトロは当然大変驚いて，まず，主にそのようなことをしていただくわけにはいかないと言って拒否しましたが，主に，[N] もしそうしないなら主の祝福に預かることができないと[n]脅かされたので，考えあらため，従順に主の御心にまかせたのでした。

[35]さて，ここで，我らが主イエスのなさったことに，そしてこのとき続いて起こったことによく注意するならば，大いなる不思議に打たれ，特に主への愛と恐れの気持ちを掻き立てられるはずです。なんという光景だったことでしょう。至福の王，いと高き主が，膝をついて，貧しい一介の漁師の，そしてそこに座っていた他の者たちの足元に順に身をかがめられ，尊いその御手で彼らの汚れた足を洗い，それから優しく拭いて，さらには，愛を込めてその足に口付けされたのですから[36]。まことに，従順の至上の師である主は，こ

32）原注 B
33）原注 N
34）原注 secundum pedum ablucio. B
35）原注 Meditacio
36）原注 nota humilitatem domini Jesu［主イエスの謙遜に注意］

の行いによってその完璧な教えを示されたのです。その上，この卑しい奉仕を裏切り者に対しても施され，卓越した従順を何にもまして讃えられたのです。

その硬い心のなんと悲しいことか。そう，アダマント石よりもどんな硬い物よりも硬く，そのように偉大な慈愛と深い謙遜の炎でも溶けないどころか柔らかくなることもなく，至上の君がなさったことを恐れることもなく，むしろ叛いて，決して罪を犯したこともなく，義を愛する方の死と破滅を思いつき，その手先となったのです。

[N] ですから我らが主イエスの愛と従順，そして裏切り者ユダの頑迷と悪には，驚嘆と恐れの両方を覚えるのです。[n]

弟子たちの足を洗うという神秘を行われた後，主は再び前に述べた晩餐の場所に戻られ，弟子たちと共に席について，今なぜそのようなことをされたのか語られ，彼らの主であり，師である主が模範を示したのだから，主に倣って，たがいに従順であるように，たがいに足を洗いあうだけでなく，他の者に行った過ちを許し，互いに相手に善いことを願い，行いなさいと諭されました。それは主が弟子たちに語られた次のような言葉からわかります。「わたしがあなたがたにしたことがわかり，そのとおりに実行するなら，幸いである」(ヨハネ，13：17)。

[N] また，前に述べた過越の小羊の第一の食事の後，手を洗ってきれいにすると，主は弟子たちに主御自身の尊い体という第二の食事を弟子たちに与えました。それこそ美味なる物の中でも最も美味なる物で，人が肉体のための食事をし，宴をするときに，まず粗野でありふれた食事を出し，そのあとにもっと上品で美味なものを出すのに似ています。そこで，次に，第三の事項について語ることにしましょう。[n]

[37]イエスの尊い体という，その至高の秘蹟に関する第三の事項に向けて，ここで私たちの心を厳かに高揚させ，心で，そのこの上なくすばらしい威厳と言葉にできないほどの慈愛に感嘆し，考えてみましょう。この尊い秘蹟をこのような形で行い，定めることによって，主は，ご自身をわたしたちに託され，霊的な食べ物として残してくださったのです。

主は弟子たちの足を洗い終わると，前に述べたように弟子たちと共に晩餐をされた場所に戻られ，古い掟の献げ物の終わりと新しい契約の始まりとして，自らを私たちのための献げ物とし，その尊い御手でパンをとりあげ，全能の神である父を見上げて，パンを祝福し，賛美の祈りをあげました。その祝福により，パンは主の体となり，そして主はそれを弟子たちに与えて言われました。「とって食べなさい。これはあなたがたのために与えられるわたしの体である」(マタイ26：26, ルカ14：22; マルコ22：19)。

37) 原注 tercius articulus B.N.

そして次に，同じようにぶどう酒の杯を取って言われました。「この杯をとって飲み干しなさい。この杯は，罪が赦されるように，あなたがたと多くの人のために流されるわたしの血である」(マタイ26：27-28；マルコ14：24, ルカ22：20)。

次に，主は，[N] 弟子たちに，そして彼らを通じてすべての司祭にその聖別の力をお与えになり，[n]「わたしの記念と記憶として，その度ごとに，このように行いなさい」と言われました（ルカ22：19)。

さてここで，キリスト者であるあなた，特に司祭であるあなたは，あなたの主であるイエス・キリストが，いかに愛情深く，いかに懸命に，最初にこの尊い献げ物をされたか，そして次に尊い御手でこれを切り分け，その恵まれた，愛する弟子たちに話をされたかをよく注意しなさい[38]。[N] また，他方で，主がその神秘的な，すばらしい秘蹟を行われるのを初めに見たときの，弟子たちの敬虔な驚きを想像してください。そしてその後，いかに恐れと敬いをもってそれを主からいただき，受け取ったかを。まことに，このとき彼らは人知の限界を超えて，ただ主が言われ，行われたことのすべてを心から信じることだけを考えて，一切の疑いをはさむことなく，主は神であり，過ることがないと信じたのです。あなたも，この尊い秘蹟の力と霊的な甘美な味を感じたい，手に入れたいと願うなら，同じようにしなければなりません。[n]

[39]これこそ，何よりも，人の魂を神にふさわしく，喜ばしいものにする，甘い，尊い記念です。これは，心から愛を込めてキリストの受難を黙想することによって，あるいは特に秘蹟として食べることによって享受することができます。ですから，この愛の贈り物は，理由があって，人の魂に火をつけ，与えてくださった我らが主イエス・キリストに向かって聖火を燃え立たせるのです。これ以上大切で，これ以上甘美で，これ以上わたしたちのためになるものは主ご自身以外にないからです。祭壇で秘蹟として受け取る主は，まちがいなく，血肉を受けて，処女(おとめ)マリアからお生まれになり，わたしたちのために十字架の死に甘んじ，亡くなってから三日目に復活されて天に昇られ，父の右に座っておられる方，[N] そして裁きの日に再び来られて，全人類をお裁きになる [n] 神の子イエスに他ならないからです。主の力にこそ，生と死があり，主は天国と地獄を造られたお方，ただ一人わたしたちを永遠の命，あるいは永遠の死を与えることができる方です。

[N] ですから神であり人であられる方が，パンの形をしたあの小さい聖体の中に含まれているのであり，日々，天の父のもとへ，わたしたちの霊の癒しと永遠の救済のために献げられるのです。

---

38）原注 N

39）原注 B

[40]以上は，聖教会がこの尊い秘蹟についてわたしたちに教えてきた真の信仰です。

わたしたちはもう少しこの尊い主イエスの食卓に座って，このわたしたちの霊の食べ物，特に，わたしたちの前に出されたその高価な，最も美味な食事，つまり前に述べたようにこの聖餐の中の我らが主イエスの尊い体に心を向けましょう。そうして，心のうちで想像することで，この天の食べ物の甘さを味わいましょう。まず，その尊い秘蹟が慈愛と道理から行われ，命じられたことを想い，そして次にそれが選ばれた者に慰めと信仰の強さを与える偉大な力と不思議に心を向けましょう。

[41]第一の点については，三位の第二の神格である全能の神の子が，その至上の愛と限りない善から，わたしたちと神格を分かつことを望まれ，人を神にするために，わたしたちと同じ体となって，人となられ，さらに，主がわたしたちと同じ血と肉を持たれ，わたしたちの癒しと救いのためにすべてを下さったということをよく考えなければなりません。主は，天の父なる神に，十字架という祭壇の上で，その尊い体を，わたしたちの罪を贖うために献げてくださり，また，わたしたちを惨めな隷属の身から買い戻すための代価として，またわたしたちのすべての罪を洗い流し清めるために，その尊い血を流されたのです。そして主は，そのいと高き恵みが永遠にわたしたちの中に宿るようにと望まれて，パンとぶどう酒に似せて，体を食べ物に，血を飲み物にし，すべての真のキリスト者にくださいました。その次第は，この尊い秘蹟の由来について上に述べたとおりです。

さてここで，使徒たちがどれだけ驚いたか，心の目で見て，考えて見ましょう。目の前に，我らが主イエスが自分たちと同じ，ただの人の姿でおられ，彼らとともに実際にそこに座っておられます。そして，肉的目にはただのパンとしか見えないご自身の体を手に持って，「これはあなたがたのために与えられるわたしの体である」と確約され，またただのぶどう酒としか見えない杯の中のものについて，「これはあなたがたの罪が赦されるように流されるわたしの血である」と，言われたのです。しかしパンと見えたものは，聖別を受ける前のパンではなく，ワインも同様，見かけとは異なり，ただパンやぶどう酒に外見が似ているだけで，真のキリストの，いわば肉と血が含まれているのです。

しかしその時，どんな人の知恵，道理がこれを理解できたでしょうか。まったく，皆無です。ですからその真の使徒たちは，そのときすべての肉的道理と知恵を捨てて，前に述べたように，ただ彼らの主を心から信じる気持ちのみに委ねたのでした。しかしユダは別で，不義と不信仰を咎められ，彼はこの尊い秘蹟を受け取って，地獄へ落ちたのです。

---

40）原注 N

41）原注 primum

[42]そして今，ユダの仲間となって，信仰を誤り，聖なる祭壇の秘蹟が，肉的な感覚では，見た目も，味も，触れた感触も，そのようであるからといって，聖別される前のまま，本質的にただのパンとぶどう酒であると言う者たち全員が同じ運命にあります。これはユダよりもさらに責められるべきです。なぜなら，彼らはユダのように，その聖体の横にイエスの肉的姿を見ているわけではないので，彼らはユダより簡単に信じることができるはずだからです。神ご自身と聖教会が教えてきたとおりに信じることができないならば，呪いもさらに大きいでしょう。特に，この尊い秘蹟の真の教えは，何百年という歳月の間，しかも多くの聖人たち，殉教者，懺悔聴聞司祭，その他，最後の日までこの信仰を守り続けて死んだ真のキリスト教徒たちによって守られてきたのですから。

[43]この信とは，端的にこういうことです。キリストの言葉の力によって作られた祭壇で授かる聖体は，パンの形をした正真の神の体であり，ぶどう酒の形をとった正真の神の血であり，パンとぶどう酒の形は人の肉の感覚には本質的に肉とぶどう酒であると見えるのですが，しかし実際はそうではなくて，実質は神の体と血に間違いなく，パンとぶどう酒という聖餐は，人の理解を超えて不思議であり，神秘であります。その聖体は実際のパンやぶどう酒と同じ特性を持っているけれども，本質的な実質はなく，十字架の死に甘んじられたキリストの正真の体がその御聖体の中にパンの形と見かけのもとに，実際に在るのであり，ぶどう酒の見かけのもとに，キリストの正真の血が，実際に，完璧に，一切の偽装や虚偽なく，在るのであり[44]，間違った異端者が言うような比ゆ的な話ではありません。

以上の点に触れたのは，他でもない，信仰に対して間違った関わりをしている，無知なロラード派の人々のためです。

さらに，上に述べた，この卓越した聖体について，神聖な博士たち，大学者たちによって教えられる聖教会の信仰は，多くの書物で読み，日々の説教や教えに聞く様々な奇跡によって裏付けられています。

ところがここでロラード派の人々は，そのような奇跡はでまかせ，でたらめに過ぎないと言って，これを支持する聖教会を笑い，侮辱するのです。なぜなら彼らは，この貴重な御聖体の甘さを味わうこともなく，その恵みの働きを自分の中に感じることもないので，他の人が味わう，感じるということが信じられないのです。

[45]しかしここで，すべての誤ったロラードを苦渋させ，この御聖体の秘蹟を心から愛し，

42）原注 contra lollardos
43）原注 fides sacramenti
44）原注 nota
45）原注 nota bene prior lufe

讃えるすべての人を慰め，そして特に，そのいと高き権威，創造者である，我らが主イエスを愛し，讃えるために，この尊い御聖体が感覚的にもたらす恵みについて[46]，わたしが確かに知っていることを，いくらか，特にお話しすることにしましょう。その不思議な効果と感覚は，一般的な人の力を超えて，高らかに，尊いイエスがその聖体の中に肉的に在るということを示し，証明します。

これはある，今も生きている，わたしの知っている人の話です。ひょっとしたらわたしが知らないだけで他にも大勢いるのかもしれません。この人が，我らが主イエスの恵みによって，度々，その尊い聖体を扱うに際して主に触れて，霊の内なる目と，主の尊い受難を懸命に黙想することによって，突然，自分の体の中に歓喜と快感が流れ込むのを感じたのです。その快感は，どんな生き物が，この世で生まれ持った感覚で感じることのできる最高の快感とも比較にならぬほど。その歓喜，快感によって全身の隅々までが心地よく歓喜に満ちた熱で燃え上がり，ちょうど蝋が炎に溶けるように全身が溶けるようで，あまりの快感に，体が持ちこたえられない，我らが主イエスの，人を超えた御手が護り支えてくださらなければ，だめになってしまうと思われるほどでした。

ああ，主イエスよ，そのときその人は，あなたの尊い肉的存在をその尊い聖餐の中にそのように感じ，そのために，あたかもあなたと体で一つになったかのごとき，言葉にならない喜びを感じて，どれほど好ましい楽園の至福にみたされたことでしょうか。確かに，誰にもそれを語り，表現することはできないし，さらには，実際に経験した人でなければ，それを完全に，正確に認識することはできないと確信しています。なぜならこれは，間違いなく，隠し蓄えられたマナ，つまり，聖ヨハネが黙示録で証言しているように，これを感じる者にのみ認識できる天使の食事だからです。そして本当にそれを感じる人は，預言者ダビデと共に，体と心で，霊と肉で，生ける神から至上の喜びを享受し，「ああ主よ，甘美な御恵みはいかに豊かなことでしょう。あなたを真の愛で畏れる人のためにそれを隠し蓄えてくださいます」(詩篇30：20)[47] と言うことができるのです。

我らが主イエスの，この恵み深い，不思議な奇跡の御業を，わたしはこのように理解しています。主は，感覚的に，御恵み深い甘美な肉的存在を，そのこの上なくすばらしい聖餐の聖体に，上に述べた経験者が部分的に伝え，またわたしが簡単に，不完全ながら書き記したようなかたちで，示されるのです。その奇跡の御業は，あらゆる状況を踏まえても，この秘蹟に示されたことに関して書かれた多くの偉大な奇跡のどれにもましてすばらしい

46) この部分は，カンタベリ大司教Thomas Arundelが『黙想』を賞賛した言葉をエコーしている。See Sargent, p.287, note 154.16-19.

47) 原注 Quam magna multitudo dulcedinis &c.

もので，肉的感覚について言えば，確かに視覚の及ぶところではなく，見た目の変化がどうのこうのではなくて，むしろ真実そのものであると言えます。

なぜならば，我らが主イエスは，信仰を強くし，あるいは選ばれた愛する者たちを慰めるために，その尊い御聖体の中に，告白王聖エドワードのときのように幼子の姿で，あるいは聖グレゴリウスの伝記などに書かれているように血にまみれたお姿で現れ，その量的なものに見られる肉的な類似は，十字架に架かられた我らが主の，実際の肉的量やお姿とは確かに一致しないのであり，御聖体の中に，わたしたちの肉的視覚から隠されているのです。

しかし，上に述べたその恵みの贈り物を受け取る人は，真の信仰の御聖体そのものの形以上の変わったものを目で見るわけではありません。ただ，特別な恵みによって魂が照らされて，内なる目で，十字架に掛かられたときのイエスの尊いお姿をありのままに見て，この上ない喜びに満たされるのです。

そして同時に肉的感覚でも，上に述べたような形で，我らが主イエスが実際にそこにいらっしゃるように感じるのであり，そのあふれる喜び，快感は，言葉では完璧に表現することができないし，それを実際に感じる者でなくては頭で理解することができないのです。

その肉体上の喜びの感覚は，聖教会が使徒たち，弟子たちについて聖霊降臨日の折に歌う喜びに似ているように思えます[48]。その日，聖霊が，突然，炎の形で彼らに送られて，言葉にならない喜びが彼らの体の内に流れ，五臓六腑が聖霊で満たされ，厳かに神を讃え喜んだのです。そして，上に述べた恵みの贈り物を受けた者は，この時，心からダビデと共に，格別の気持ちを込めて，感謝に満ちて，「命の神イエスに向かって，わたしの身も心も喜びを叫びます」（詩篇83：3）[49]，主に永遠の恵みあれと，そしてこのいと高き神から人への恵みの贈り物を讃え，心から唱えることができるでしょう。

しかし，この最高の美味，尊い食事を霊的においしく噛みしめ，扱うことについてはしばし中断して，さらに，我らが主イエスが晩餐の後で，このことに関連して弟子たちに説かれた尊い教えについて考えてみましょう。これは，先に述べた第四の事項です。この尊い聖体については，もし，我らが主が御恵みを送ってくださり，さらに語ることが許されるなら，この本の最後に，我らが主イエスがこの世で肉体を持って過された尊い生涯すべての締めくくりとして，聖教会が定める，ありがたい，道理にかなった決まりに従って，この恵みの聖体の立派で荘厳な祝祭について，我らが主イエスの祝祭すべての完成となるよう語るつもりです。主の御名が永遠に讃えられますように。アーメン。[n]

48）原注 Impleta gaudent viscera &c.［聖霊降臨日に歌われる賛美歌］

49）原注 Cor meum & caro mea &c.

[50] 話を進めて，第四の事項に関し，キリスト者よ，愛の炎の灯りを心に持つなら，この至上の師であるイエス・キリストが弟子たちに，どのようにしてこの霊的甘美，愛と慈しみという燃える熾火に満ちた，尊い説教をされたか，想像してください。主はこの恵みの聖体を弟子たちにお与えになると，他ならぬ，いと高き慈しみから，宿敵，不義のユダに対して，「しようとしていることを，今すぐ，しなさい」と言われました（ヨハネ13：27)[51]。[N] それは，彼の裏切りをご承知の上で，わたしはお前の場所を知っている，だからすぐそこに行きなさいと言っておられるようでした[52]。しかし，他の弟子たちはイエスがなぜそのようなことを言われたか一人もわからなかったのです[53]。[n][54]そこで，この呪われた裏切り者は，前に述べたように，水曜日に主を売った祭司長の元へ行き，主を捕らえるために一緒に来てくれと頼んだのです[55]。その間，我らが主イエスは，前に触れた，長い，尊い説教を弟子たちにされました。

[56][N] 第一に和を讃えた，この有益な教えを簡単に要約するならば，主は，弟子たちに三つの主要徳目，つまり，信，希望，愛を，特に教え諭されたと言えます。

[57]まず主は繰り返して愛を説かれ，特に熱心に，「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。」(ヨハネ13：34) と言われました[58]。また「互いに愛し合うならば，何よりこの一つのことによって，あなたがたがわたしの弟子であることを，皆が知るようになる」(ヨハネ13：35) とも言われ[59]，そして主を愛すると言う行いによってこの愛をしっかりと維持するよう説かれた後，こう言われました。「あなたがたは，わたしを愛しているならば，わたしの掟を守る」(ヨハネ14：15)[60]。また，その後，「わたしを愛する人は，わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され，父とわたしとはその人のところに行き，一緒に住む」(ヨハネ14：23)[61] と言われ，そのほか各所で愛と和を，このときの主の証言の第一の遺産として，格別に推奨されたことは，福音書にあるとおりです。

---

50) 原注 4 usarticulus, B
51) 原注 Quod facis, fac citius.
52) 原注 N
53) ヨハネ13：28.
54) 原注 B
55) Cf. ヨハネ18：3.
56) 原注 N
57) 原注 Caritas.
58) 原注 Mandatum nouum do vobis &c.
59) 原注 In hoc cognoscent omnes quod mei &c.
60) 原注 Si diligitis me, &c.
61) 原注 Qui diligit me; sermonem &c.

[62] 信についても，主は弟子たちに教えを説かれ，主が神であることに対する信仰をより完璧に固めるために，このように言われました。「心を騒がせるな。恐れることはない。神を信じなさい。そしてわたしをも信じなさい」（ヨハネ14：1）[63]。そして，父なる神と主は，一人の神であり，主は人として父には劣るが，しかしながら神としては，常に父と並んで同格であることを教え，そこで，主に，御父をお示しくださいと言ったフィリポを戒めて，「わたしを見た者は，父を見るのだ」と言われました（ヨハネ14：8-9）[64]。そしてこの信の徳目の結論として，「わたしが父の内におり，父がわたしの内におられると，わたしが言うのを信じられないのか。もしそれを信じないなら，業そのものによって信じなさい」（ヨハネ14：11）と言われました[65]。

[66]希望についても，主は，様々な形で弟子たちに力を与えられました。まず祈りの効用に触れて，弟子たちにこのように言われました。「あなたがたがわたしの内にあり，わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば，望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる」（ヨハネ15：7）[67]。

[68]そしてまた，迫害と世の憎しみに備えて，希望を与え，「世があなたがたを憎むなら，あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい」（ヨハネ15：18）等々と，聖書にあるように言われ，彼らの主であるご自身を模範として，迫害に耐えるときも希望を忘れないようにと諭されました[69]。三番目に，主は，主の肉的姿が彼らのもとからなくなっても，希望を持て，絶望するなと諭され，まず，主の残酷な死によって，主がいなくなったことを深く悲しむが，その後，主の輝かしい復活と，父のもとへの昇天，そして彼らに送る聖霊によって，その悲しみは永遠の喜びに変わるのだと教えられました[70]。それは彼らをいかなる病においても至上に慰め，彼らに真実のすべてを教えるのだと。

そして主は，話をこのような言葉で締めくくられました。「これらのことを話したのは，あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で悲しみと苦難がある。しかし希望をしっかり持って信じなさい。わたしは既に世に勝っている」（ヨハネ

62）原注 Fides
63）原注 Non turbetur cor vestrum &c.
64）原注 Creditis in dominum & in me credite. Qui videt me vide &c.
65）原注 Non creditis, quia eto in patre &c.
66）原注 Spes primum
67）原注 Si manseritis in me & verba &c.
68）原注 2 m Si mundus vos odit, scitate &c.
69）原注 3 m Haec locutus sum vobis ut in me &c.
70）ヨハネ16：16-24.

16：33)[71]。そう言われているとおり，あなたもしなさい。

この後我らが主イエスは，言葉を父に向けられ，美しい目で天を仰ぎ，まず人として御自分を託し，次に，優しく弟子たちのために祈り，さらに弟子たちだけでなく，彼らの言葉によって主を信じるようになるすべての人のために祈られ，真の愛と慈しみによってすべての人がついには一つになるようにと祈られました[72]。父が子の内にあり，子が父の内にあるように，彼らも，ただ一人の神と子と聖霊の内にあるように[73]。[n]

[74]ああ，主イエスよ，これらの御言葉は，弟子たちの心をどんな不思議で貫いたことでしょうか。まことに，彼らはあなたをそれほど激しく愛していたので，あなたが特別に守ってくださらなければ，とても持ちこたえることができなかったでしょう。

この恵み深い，尊い説教の全次第を心のうちで考え，懸命に論じる恵みを受ける者は誰でも，イエスに対する燃える愛を必ずや掻き立てられて，主の恵みの甘美な教えにうっとりと安らぐでしょう。他方，主の弟子たちが，悲しみに頭を垂れて立ちつくし，泣きながら重いため息をつく様を想像するなら，誰でも，当然，彼らに対し，深い同情の心をもよおすでしょう。なかでもヨハネは，イエスと最も親しかった上に，特別な恵みによって，[N] すべての聖教会に教えを伝え，わたしたちを慰めるために [n] [75] これらの甘美なイエスの御言葉を正しく書き残すよう選ばれていたので，他の誰よりもイエスの語られた言葉すべてに特別の注意を払っていました。

さらに，イエスの御言葉の中に，弟子たちに，立ち上がりなさい，出かけようとおっしゃったとあります[76]。ああ，愛する神よ，そのとき彼らはどれだけの恐怖を覚えたことでしょう。どこに行くべきかもわからず，主が彼らのもとから去っていかれることも大変恐ろしく思われました。しかし，主はその後道々説教を続け，弟子たちもその話に懸命に耳を傾けました。

[N] ここで，弟子たちが，親鳥を追う雛のように主に従う様を見てください。雛たちが親鳥の羽の下に入ろうと，あちらになりこちらになりしながら追うように，弟子たちも，今一人が，次にまた別の一人が，主の御言葉を聞き，主の隣に立とうと懸命で，これを主は耐え，また大変喜ばれたのでした。

とうとうこの説教が終わり，教えが成し遂げられると，主は弟子たちと共に，キドロン

71) 原注 In mundo presuram habetis &c.
72) ヨハネ17章。
73) ヨハネ17：21.
74) 原注 B.N
75) この加筆部分も，Arundelの文言を響かせている。See Sargent, p.288, note 158.20-21.
76) 原注 B.

の谷の向こうの，園あるいは庭に入られ，そこで裏切り者のユダと一隊の兵士とを待たれましたが[77]，これについては，この後，主の受難の話で語りましょう。

[78]ここでは，我らが主イエスが，わたしたちに，この日の夕刻から夜にかけて，五つの大切な徳目の模範を示されたということを心に留めておきましょう。つまり，第一に，弟子たちの足を洗うことで示された，深遠な謙遜です。次に，主の尊い御聖体というすばらしい秘蹟と，慈愛の燃える熾火に満ちた甘美な説教とで示された至上の愛です。そして三番目が，裏切り者と，その後に受けられた迫害を寛大に許されたことによって示された，卓越した忍耐です。四番目が完全な服従で，その過酷な受難，つらい死を，父の御心に従い喜んで引き受けられたことで示されました[79]。そして第五に敬虔な祈りを教え，長い，熱烈な祈りを三回にわたって，尊い血を流しながら続けられました。これらの五つの徳目によって，主はわたしたちに，主イエスに従うという恵みをお与えくださったのです。主に永遠の恵みあれ。アーメン。

以上で木曜日の黙想を終えます。次に，特に金曜日にふさわしい，受難について語ります。[n]

77）ヨハネ18：1 f.

78）原注 nota bene quinque notabilia

79）原注 5